

六本木ヒルズレジデンス B 棟 43 階で発情期  
を迎えた夜に番い契約  
済みの財閥御曹司  $\alpha$  か  
らセキュリティを全部  
閉められて三日三晩孕  
むまで離してもらえな  
いカントボーイ  $\Omega$

ベランダのドアが内側からロックされる電子音を、玲は背中で聞いた。

「——え」

次に玄関、地下駐車場直結エレベーター、コンシェルジュ通報、非常階段。連続して鳴る短い電子音が、四十三階の密室を順番に塗りつぶす。床のカルカット大理石が裸足に冷たい。なのに、首筋から下だけが煮え立つように熱い。

「桐生さん。これ、解除して」

声が裏返った。膝の裏に汗が滲む。スラックスの内腿に、覚えのある重さが下りていた。

「明後日の朝までは無理だよ」

革のソファに浅く腰掛けた男が、バカラのグラスを傾けた。ドンペリの泡が一粒、グラスの縁を駆け上がって弾ける。男の指は長い。グラスの脚を握る親指の腹に、青い静脈が浮く。「今ちょうど、君の発情期のピークなんだろう？」

「……っ」

ガラスの向こうで東京タワーが赤く灯る。地上百五十メートル。眼下を流れる首都高のテールランプが、玲の歪んだ視界の中で滲んだ。逃げ場のない高さで、うなじの後ろが、じわりと熱を孕む。

「抑制剤、切れて二日でしょ。隠してたよね」

桐生隼斗の声は、いつも通り低い。会議室で笑わない男の、丁寧な声。

「玲。匂いがする。ミルクと蜂蜜」

「やめ……っ」

言い終わる前に、膝が崩れた。

ソファに沈み込んだ玲のスラックスのベルトを、男が指一本で寛げる。冷たいワイングラスを握っていたはずの指先が、内腿に置かれた途端、火傷するくらい熱かった。

「ここ、もう濡れてる」

下着の上から、手のひら全体で押し付けられて、腰が浮く。

「やっ……あ、あ……っ」

(嘘だ。なんて、こんなに——)

脳の奥で警報が鳴る。男なのに。自分はΩで、確かにカントボーイだけど、それでも——下着の縫い目を蜜が伝う。布が湿る音まで聞こえる。フルグレインレザーのソファに、自分の体温で温まった黒い染みが広がる。

「桐生さん、契約はしたけど、儀式は別だって、っ……」

「うん。聞してる。二年前から、ずっと聞してる」

「あっ♡」

指の腹で布越しにそこをなぞられて、声が出た。自分の声じゃないみたいに高い。男の指がカントの形を布越しに辿る。

割れ目に沿って、上から下へ、下から上へ。それだけで腰が跳ねる。

「玲。発情期の名前は、何回呼ばれたい？」

「……っ、なに、を……」

「玲、玲、玲。——どう？ 腹の奥、疼いてきた？」

疼いた。お腹の奥が、男の声に合わせてキュンと締まる。自分の意志じゃない。Ωの身体が、αのフェロモンに反応する。下腹のずっと奥で、子宮らしき器官が、ジン、と熱を持つ。

（うそ、っ、声だけで、お腹の中、ひくついて——）

「ね、玲。ここ、自分で開ける？」

下着のウエストに男の指がかかる。冷たい爪先が肌に触れた。

「やです……自分で、なんて、っ」

「そう。じゃあ、僕が」

ずるり、と下着が引き下ろされる。膝の上で布が止まり、それ以上は下ろされない。ちょうど脚が閉じられない高さ。空気が直接、濡れたそこに触れる。四十三階の窓ガラス越しに、東京の夜景がそれを見ていた。

「あ、っ……桐生さん、見ない……っ」

「綺麗だよ。二年前より、もっと」

長い指が、内腿を辿って割れ目の入口に触れる。指先がぬるりと滑り、入口を撫でただけで、ぐちゅ、と音が立った。

「あ、おっ♡」

（うそでしょ、まだ指でなぞられてるだけなのに——）

指の腹がクリトリスを掠めた。電気を流されたみたいに腰が反って、ソファの背もたれに後頭部が当たる。

「ひうっ♡」

「ここ、二年前は触らせてもらえなかったよね」

「だっ、だって、契約は身体の関係抜きで、って、っ、あぁ……っ♡」

「うん。守ってきた、僕は」

守ってきた、と言いながら、男の指は割れ目を上下にしごく。クリトリスの皮の下、剥き出しになりかけの突起を、指の腹でぐりぐりと押し潰す。

「ひっ♡ そこ、そこやだ……っ」

「やだ、じゃないでしょ。腰、押し付けてきてるよ」

言われて気づく。自分の腰が、男の指に向かってへこへことう動いている。下着越してはない、剥き出しの肉と肉が擦れて、ぬちゃ、ぐちゅ、と粘った音がリビング中に響く。

「桐生さん、っ、ほんとに、無理、っ」

「何が無理？」

「これ以上、っ、されたら、あぁ……っ♡」

「されたら、何？」

返事を待たずに、男の中指が、ずぷ、と中に沈み込む。

「——っおおおおっ♡♡」

声が止まらない。一本の指が根元まで埋まっただけで、視界に星が散る。男の指の関節を、自分の中の襞が一つずつ覚えていく。

（あ、これ、覚えちゃう、身体が、桐生さんの指の形、覚えちゃう……っ）

「あったかい。それに、すごく狭い」

男が独り言のように呟いた。お腹の奥に向けて、指の腹が壁をぐっと押し上げる。ザラついた一点を撫でられた途端、玲の足がガクガクと痙攣した。

「ひっ♡♡そこ、そこおかしくな、っ、あ……っ♡」

「Gスポット、ちゃんとある。ね、玲。男なのに、ちゃんここにある」

「言わな、っ、いで……っ♡」

男なのに、と言葉にされて、ぎゅっと目をつむった。目尻から涙が一粒、転がり落ちる。男としてのプライドが、男の指一本で粉々に碎ける。なのに——身体は、もっと欲しがって、勝手に男の指を奥へ奥へと呑み込む。

「玲」

「ふっ、あ、っ……」

「噛んでもいい？」

「っ、噛、んだら、ぼく、っ」

「分かってる。噛むのは最後。今は——」

男が膝で玲の脚を割る。すでに張り詰めたスラックスの前を、男は自分で寛げる。引きずり出された肉棒が、玲の腿の内側に当たった途端、本能で、口を開けて喘いだ。

「ふあっ……♡」

（熱い。これ、人の体温じゃない、っ）

「玲、見て。これが、今から君の中に入る」

「やっ、見ない、っ、あ、あ、っ」

見たくないのに、目を逸らせない。男の腹に張り付くほど反り返った、太い、長い、血管の浮いたそれ。あれが、自分のあそこに、入る。膝の裏が震えた。お腹の奥が、それを欲しがって、勝手に切なくキュッキュッと痙攣する。

「行くよ」

「ま、まっ……っ」

待って、を言い終わる前に、ぐぷ、と先端が入口に押し当てられる。

ずぷ、ずぷ、ぐちゅん♡——

「ああああああ——っ♡♡♡」

一気に半ばまで貫かれた。喉の奥で、女みたいな声が爆ぜる。

「あ、あ、まっ、まって、桐生さ、っ、奥、おく、まで、っ」

「うん。奥まで入れるよ。二年待ったんだ」

「ひっ♡ お、っ、あ……っ♡」

ずん、と最後まで押し込まれて、子宮口らしき場所に先端が触れる。コツンと当たった衝撃で、意識が一瞬遠のいた。

（うそ、っ、お腹の中、桐生さんでいっぱい、っ、人が入る場所じゃないのに——）

ぐちゅん♡ぐちゅん♡——男が腰を動かし始める。最初から容赦がない。男の長い指が玲のうなじを掴んでいる。番いの噛み痕を入れる場所、と頭の隅で察した。

「おっ♡ おく♡ おく届いてる♡♡ やだ、桐生さ、っ、はやと、さ……っ♡」

「呼んで」

「は、はやと、さ、あっ♡♡」

「もっと」

「はやとさ、っ♡ はやとさん、あ、っ♡」

四十三階の窓ガラスに、自分の歪んだ顔が映る。耳まで真っ赤で、口を半開きにして、唾液が顎を伝う。これが自分？ 藤代玲、自立したアートディレクターのつもりだった男が？

「玲。中で出すよ」

「ま、まって、っ、避妊、っ、避妊、してな、っ」

「Ωが番いαに、避妊を頼むのは違反でしょ」

「あっ♡♡ そんな、契約、っ、あ、っ、奥、奥に当たって、っ♡♡」

「孕ませるから」

低い声で告げられた。

「ひっ♡♡」

言葉と同時に、男の腰の動きが速まる。ぐちゅ、ずぷ、じゅぷ、ぬぷ——粘液音がリビングに響き続ける。男の指がうなじを掴んだまま、脚を肩に乗せた。腰が浮いて、より深く、より奥に届く角度になる。

「ひぐっ♡♡ そこ、そこっ、らめ♡ らめ、桐生さ、っ、奥、ぐりぐり、っ♡♡」

「玲、孕め。今、孕め」

「おおおお——っ♡♡♡」

ドピュッ♡♡ドピュウツツ♡♡♡——

子宮口に押し当てられた先端から、熱い液体が奥へ奥へと注ぎ込まれる。腹の中が熱で満ちる感覚に、身体を硬直させて達した。なのに男は止まらない。一回出してもまだ硬いまま、中をかき混ぜ続ける。

「あ、っ、まだ、っ、出てる、っ、まだ、っ♡♡」

「足りない。三日分、出すから」

「ひいっ♡♡」

革のソファに、玲の零した蜜と男の精液が混ざり、黒い染みを広げた。

「玲。立てる？」

「……たて、ない、っ」

返事を聞く前に、身体は抱き上げられる。挿入したまま。中に入ったままで、男がリビングを横切った。一步動くたびに、男の肉棒が中で擦れる。

「あっ♡や、っ、歩、歩いちゃ、っ、あ……っ♡」

「バスルームに行こう。汗、流したいでしょ」

「あ、っ、はや、と、さ、っ、奥、当たる、っ、歩く、たびに、おく、あっ♡♡」

バスルームのドアが開く。オニキスの一枚岩を削り出したワンピース浴槽が、間接照明に照らされた。湯気が立ち上る。男はいつの間に湯を張らせていたのか——コンシェルジュ封鎖のはずなのに、と頭の隅で考えて、玲は察した。最初から、この男は、ここに玲を連れ込むつもりで、全部用意していた。(用意周到、なんてもんじゃない、っ、これ、最初から、計画……)

「考え事？」

「あ、あ、っ、なに、も、っ」

湯の中に、繋がったまま沈められた。お湯が、繋がった場所に、ちゃぷんと寄せる。

「ひうっ♡♡」

「お湯、熱い？」

「あ、っ、い……っ、けど、なか、っ、なか、はやとさん、の、ほうが、熱、っ」

言ってから、自分が何を言ったか気づく。耳まで真っ赤になり、玲は男の胸に顔を埋めた。男の喉の奥で、低い笑い声がした。

「玲。それ、もう一回言って」

「言わな、っ、あ、っ、動かさないで、っ、あっ♡」

湯の中で、男が下から突き上げる。背面座位の体勢で、玲の背中が男の胸に預けられた。鏡張りの壁に、自分の身体が映る。男の長い手が、玲の胸の上で広げられた。指が長いから、片手で乳首まで届く。

「乳首、勃ってるよ」

「言わな、っ、いで、っ」

「触ってないのに、勃ってる」

「あっ♡♡」

指の腹で、左右の乳首を同時に押し潰される。湯の中で、カントがぎゅっと締まった。男が小さく息を吐く。耳元で。

「玲。中で締めるの、上手くなった」

「し、め、てな、っ」

「勝手に締まってるね」

「あっ♡ あっ♡ あ、っ♡」

ゆっくり、じわじわと、湯の中で腰を使われた。先程の獣の動きじゃない。確実に、カントを男の形に作り変える動き。お湯と、男の出した精液と、玲の蜜が、繋がった場所から白く濁って湯に混ざる。

「ひっ♡ お湯と、せいえき、混ざって、っ♡♡」

「うん。玲のお腹から、零れてる」

言いながら、男の片手が、玲の下腹に置かれる。手のひら全体で、腹の奥を撫でた。挿入されているそこを、外側からも押さえる。玲の身体は、内と外から男に挟まれた。

「ここ。ここに、僕の精液、入ってる」

「あ、っ、はや、と、さ、あ……っ♡♡」

「分かる？ ここ」

「わ、わかる、っ、わかる、からっ、あっ♡」

「言ってみて」

「あ……あ……はやとさんの、っ、せいえき、っ、ぼくの、おなかに、っ、はい、ってる、っ♡♡」

言わされた。湯気の中で。鏡張りの壁に、自分が言わされている顔まで映っていた。耳まで赤く、涙で睫毛が濡れて、口を半開きにして男の精液が腹にあると認めている自分。藤代玲はもうどこにもいない。ここにいるのは、ただ桐生隼斗のものに作り変えられかけているΩだった。

（あ、これ、おかしい、っ、自分が、自分じゃない、っ、なのに、なのに気持ちいい、こんなこと言わされて、気持ちいい、っ）

「玲、今、僕の名前呼ぶ時、敬語じゃなくなってきたね」

「あっ♡ち、ちが、っ」

「いいよ。それで」

ぐ、ぐ、と下から突かれて、奥に二回目を注がれた。湯の中で、背中を反らせて達する。男の精液が、お腹の奥でじんわり広がる感覚。湯と精液の境界が分からなくなった。

バスタブから上がり、男はシャワーで玲の身体を流す。玲は浴室の床に座らされていた。冷たい大理石の床。湯気で曇った鏡。男が屈み込んで、玲の太腿の内側を布で拭う。

その時——自分が何をしているのか分からないまま、男の手首を掴んでいた。

「……れい？」

「……これ」

息も絶え絶えのまま、玲は男の指を、自分の口元へ持っていく。

「これ、隼斗さんの、指」

舌を出して、人差し指の腹を舐めた。男が一瞬、止まる。

「覚えた」

関節を、甘く噛む。歯を立てて、男の指を口に含んだ。